

佐渡金銀山

平成17年度 佐渡金山遺跡(上相川地区)確認調査概報

2006

佐渡市教育委員会

佐渡金山銀山

平成17年度 佐渡金山遺跡(上相川地区)確認調査概報

はじめに

佐渡金山遺跡は、相川金銀山ともよばれる日本を代表する貴金属鉱山でした。遺跡の範囲内には、国の史跡である佐渡奉行所跡・道遊の割戸・宗太夫間歩などをはじめ、鉱石を採掘した間歩の跡や鉱山集落跡などが残り、戦国時代末から平成元年の休山までに至る鉱山の様々な歴史を読み解くことができる貴重な遺跡です。

これまで、佐渡金山遺跡では、佐渡奉行所跡や後藤役所跡などの政治的な中心となった場所の発掘調査は行われてきましたが、江戸時代の庶民が生活していた集落跡を調査する機会はありませんでした。今回、発掘調査の行われている「上相川」とよばれる鉱山集落跡は、現在の相川の市街地を形成する端緒となった場所です。戦国時代末から江戸時代へと移り変わる時期に集落としての歴史が始まり、江戸時代初期に最盛期を迎え、明治時代頃に廃絶して、山野に埋もれてしまいましたが、現在でも多数の石垣やテラス、寺社跡などの遺構や石磨、扣石などの遺物が残っており、往時の面影をしのぶことができます。

平成17年度から始まった発掘調査によって、相川金銀山の初期の鉱山集落であった上相川の内容が少しでも判明するよう期待するものです。

最後に、今回発掘調査に対して深いご理解とご協力をいただきました地権者の方々、そしてこの調査に参加された地元住民の方々、格別なご指導とご配慮を賜った文化庁並びに新潟県教育庁文化行政課、関係者各位に心から厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

佐渡市教育委員会

教育長 石瀬 佳弘

例言

1. 本書は佐渡市相川小右衛門町1番地他に所在する佐渡金山遺跡（上相川地区）の平成17年度確認調査のうち、平成17年7月～11月までの調査概要に関する報告書である。
2. 確認調査は、遺跡保存を目的とした遺跡内容確認のための発掘調査である。
3. 調査は、佐渡市教育委員会が実施した。
4. 調査にあたっては文化庁の平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助事業の事業採択を受けて実施した。
5. 本書の編集は、佐渡市教育委員会生涯学習課佐渡金銀山室が行った。
6. 本書の執筆は主として滝川・宇佐美（調査員）が行った。

凡例

1. 遺物は、挿図・写真図版とも同一の通し番号である。
2. 実測図は、土器陶磁器類及び土製品・小型の石製品は3分の1、銭貨は2分の1、石磨は6分の1で掲載した。

目 次

I 地理的環境と周辺の遺跡 …………… 1	3 調査の経過
1 地理的環境	
2 周辺の遺跡	
3 上相川の範囲	
II 調査に至る経緯と経過 …………… 4	III 調査概要 …………… 7
1 調査に至る経緯 ……………	1 遺構
2 調査方法	2 遺物
	IV まとめ …………… 14

挿 図 目 次

第1図 相川周辺の遺跡分布図 …………… 2	第5図 調査区 石製品分布図 …………… 8
第2図 上相川 位置図 …………… 3	第6図 トレンチ8 ピット1 …………… 9
第3図 調査区及びトレンチ配置図 …………… 5	第7図 トレンチ遺構平面図・土層柱状図 …… 10
第4図 調査区 テラス・石垣位置図 …… 8	第8図 調査区ズリ・ユリカス分布図 …… 11

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表 …………… 3

図 版 目 次

〔図面図版〕	〔写真図版〕
図版1 出土遺物実測図 …………… 15	図版2 検出遺構・土層 …………… 16
	図版3 出土遺物 …………… 17

調 査 体 制

調 査 主 体	佐渡市教育委員会（教育長 石瀬佳弘）	（平成18年3月現在）
調 査 指 導	文化庁、新潟県教育庁文化行政課、 佐渡金銀山遺跡調査委員会（会長 田中圭一 同委員 川北鎮雄、黒野弘靖、庄谷邦幸、鈴木一義、 永松武彦、中村賢二郎、萩原三雄、村上隆、山本仁）〔敬称略、五十音順〕	
総 括	坂本孝明（佐渡市教育委員会 生涯学習課長）	
事 務 局	齋藤義昭（佐渡市教育委員会 生涯学習課 佐渡金銀山室長） 下谷徹（佐渡市教育委員会 生涯学習課 佐渡金銀山室係長） 斎藤本恭（佐渡市教育委員会 生涯学習課 佐渡金銀山室主任）	
調査担当者	滝川邦彦（佐渡市教育委員会 生涯学習課 佐渡金銀山室主事）	
調 査 員	宇佐美亮（佐渡市教育委員会 生涯学習課 佐渡金銀山室主事）	
作 業 員	阿部喜代江、有井カツミ、安藤信義、伊藤勲、大坂ヒサ、鎌田直治、上林章造、北見光磨、 北見泰夫、斎藤恭真、齋藤則夫、佐々木春美、鈴木誠、中川つゆ子、松永チヨ、 山本清孝、山本裕幸、山本美恵子、渡辺千鶴子、渡辺道春〔敬称略、五十音順〕	

I 地理的環境と周辺の遺跡

1 地理的環境

相川の市街地は、海岸部の低地に沿って南北に延びる「下町」と、緩い傾斜をもった段丘上の東西に延びる「上町」からなり、T字状を成している。さらにここより山奥に「山の内」があり、その中に、江戸時代初期に最盛期を迎えた「上相川」と呼ばれる鉱山集落跡がある。

上相川は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「佐渡金山遺跡」の範囲内に含まれ、佐渡市上相川町・相川小右衛門町・相川柄杓町・相川奈良町等に所在し、濁川左岸の標高150～250mの高位段丘及びその斜面に立地し、総面積は約20haを測る。集落の廃絶後は山野となり、樹木の繁茂した場所も多いため、集落存立時の景観は大幅に変貌しているが、現在もテラスや石垣等の遺構、散乱する石磨や扣石等の遺物残り、往時の町並みをしのぶことができる。

2 周辺の遺跡〔第1図・表1〕

相川市街及びその周辺には、街を取り囲むような形で、縄文時代、古墳時代～江戸時代の遺跡が確認されている。これらの遺跡は、海岸部の製塩遺跡や江戸時代の墓・磨崖仏を除き、海岸段丘上や台地上を中心に立地する。佐渡金山遺跡（15）のうち佐渡奉行所跡等や、金太郎窯跡（12）などを除き、発掘調査等によってその性格が明らかにされている遺跡は少ない。

縄文時代の遺跡（1～4）では、縄文時代後期の土器、石鏃、石棒、石斧などが採集される。古墳～平安時代の遺跡（5～10）では、須恵器、土師器等が採集される。古墳時代後期には、製塩土器が採集された下相川吹上遺跡（7）のように、海岸部で製塩作業が行われる。中世には、鬼ヶ城跡（5）、羽田城跡（11）のように海岸部の舌状台地や台地端に小規模な城館が築かれる。

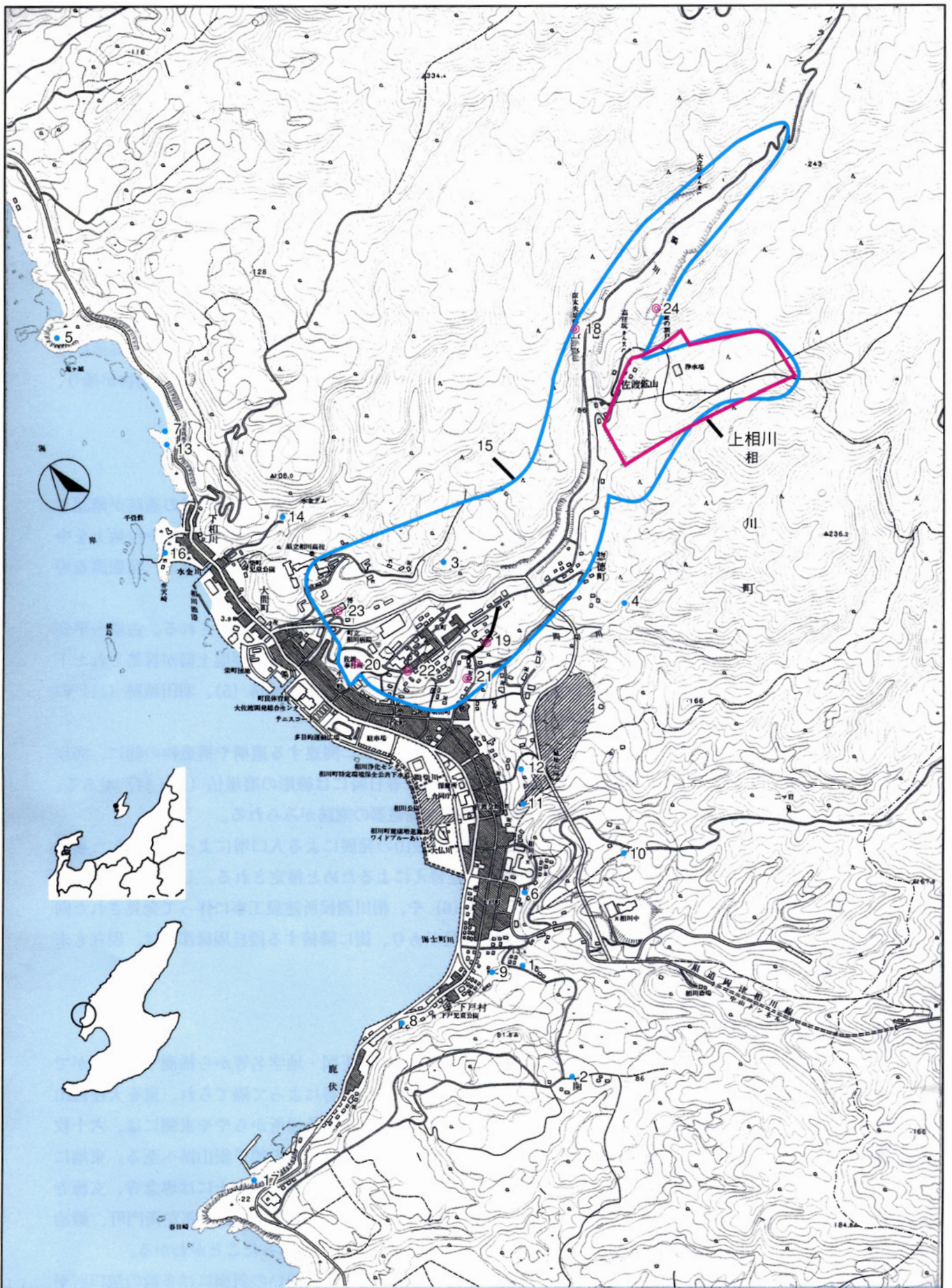
江戸時代に入ると相川が最も発展する時代となる。佐渡金山遺跡に関連する遺構や構造物の他に、海岸部には佐渡奉行の墓である県史跡の鎮目奉行墓（13）、富崎・春日崎には線彫の磨崖仏（16・17）がある。段丘斜面には、金太郎窯跡（12）、水金沢窯跡（14）といった陶磁器の窯跡がみられる。

街の中心部で確認される遺跡は少ない。これは、同地が金山の発展による人口増によって拡大した場所であり、海岸部の埋立てや、度重なる建造物の新築・建替えによるためと推定される。しかし、近年、相川小学校の建設工事に伴って発見された下戸岩陰遺跡（6）や、相川測候所建設工事に伴って発見された向の畑遺跡（1）のように、大規模な開発に伴う遺跡の発見があり、街に隣接する段丘周縁部では、現在も未発見の遺跡が存在する可能性がある。

3 上相川の範囲〔第2図〕

上相川の範囲や大まかな町割りは、地形・絵図面・過去の土地更正図・地字名等から推測することができる。北・南・西を右沢及び丹波沢・桐の木沢・濁川（北沢）の小渓谷によって隔てられ、東を大佐渡山脈より続く青野嶺の急斜面によって隔てられる。右沢と丹波沢の合流する場所からやや東側には、六十枚番所跡がある。南東端には上相川番所跡があり、青野嶺を通過して佐和田地区の鶴子銀山跡へ至る。東端には大山祇神社跡がある。桐の木沢の北側には、東一西に走る細い尾根があり、尾根上には専念寺、玄德寺等の寺院跡が連なり、尾根に登る石段が残る。当時の町名をみると、小右衛門町・九郎左衛門町、鍛冶町・上床屋町、相川町・奈良町等の人名、職名、地名に由来するものが複数あったことがわかる。

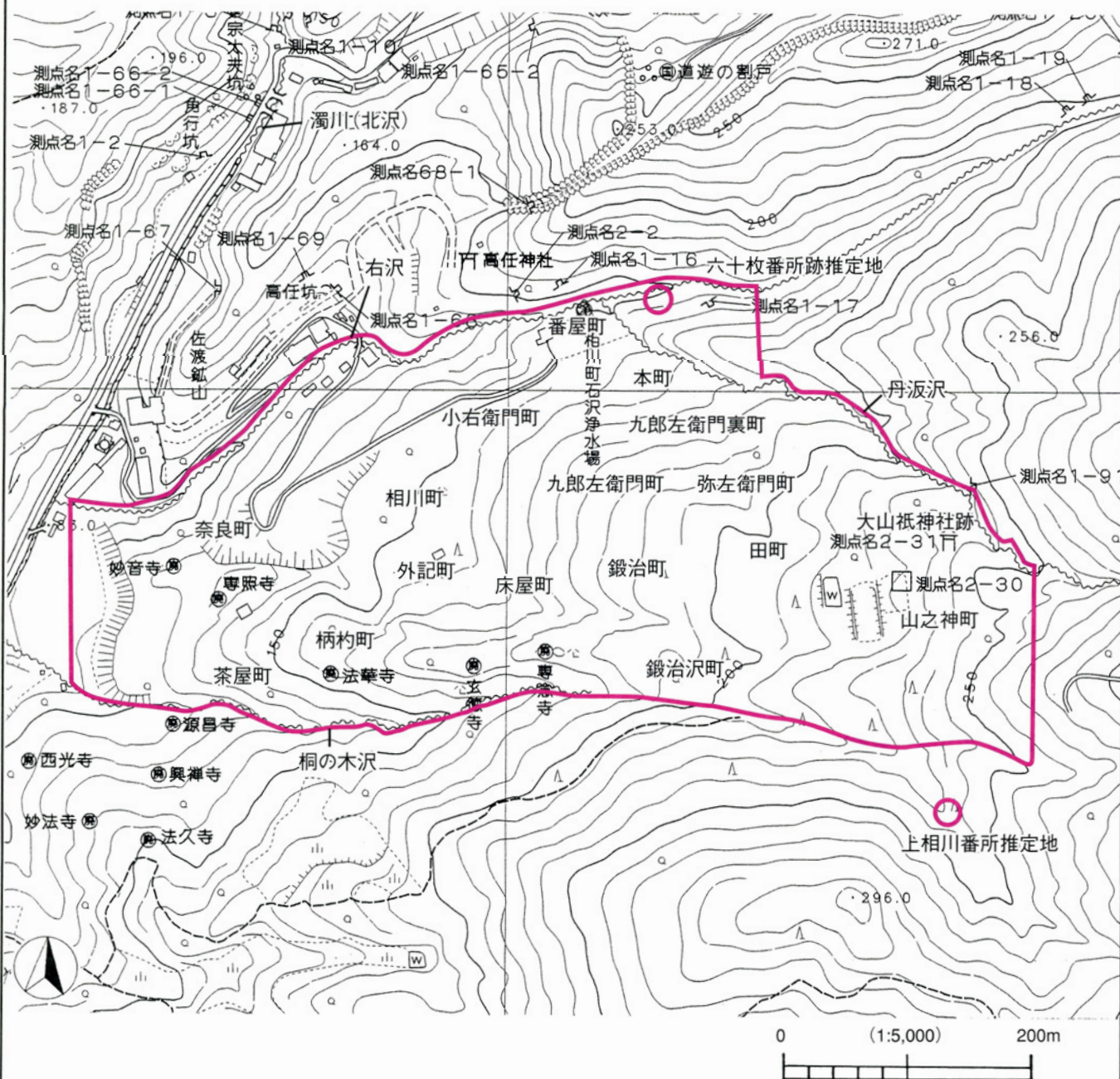
右沢を隔てて北側には、道遊の割戸を含む尾根が北西一南東に走り、沢沿いの斜面には多数の坑口跡が残る。これらの鉱石採掘跡は、当時の上相川の存立基盤を最も端的に示すものである。



第1図 相川周辺の遺跡分布図

表1 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	指定有無	13	鎮目奉行墓	江戸	県指定史跡
1	向の畑	縄文		14	水金沢窯	江戸	
2	開	縄文		15	佐渡金山	江戸	
3	中山之神	縄文		16	富崎不動磨崖仏	江戸	
4	イチカ湯	縄文・平安		17	春日崎地藏磨崖仏	江戸	
5	鬼ヶ城	平安・中世		18	宗太夫間歩	江戸	国指定史跡
6	下戸岩陰	古墳		19	南沢疎水道	江戸	国指定史跡
7	下相川吹上	古墳		20	佐渡奉行所跡	江戸	国指定史跡
8	野萩	平安		21	大久保長安逆修塔	江戸	国指定史跡
9	北野天神	平安		21	河村彦左衛門供養塔	江戸	国指定史跡
10	道達	平安		22	鐘楼	江戸	国指定史跡
11	羽田城	中世		23	御料局佐渡支庁跡	明治	国指定史跡
12	金太郎窯	江戸	市指定史跡	24	道遊の割戸	江戸	国指定史跡



第2図 上相川 位置図

Ⅱ 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

平成9年、佐渡の金銀山の重要性を世界に発信し、その保護と活用を目的として発足した「佐渡金銀山遺跡調査検討準備会」のもと、金銀山遺跡の重要性を明らかにするために、分野ごとに調査部会が設けられ、旧市町村と協力して各種の調査を進めてきた。これまでの調査成果については、平成14年度に旧相川町教育委員会より『佐渡金銀山 相川町鉱山間歩分布調査・寺社調査報告書』が刊行され、平成16年度に佐渡市教育委員会より『佐渡金銀山 相川地区石造物分布調査報告書』が刊行されて、相川地区の間歩、寺社、石造物の分布状況等が報告されている。

「上相川」と呼ばれる地区は、遺跡となった現在では、雑木林や杉林となり、地名として残る当時の町名と石垣やテラスから往時の集落景観がうかがえるのみである。当該地は、鉱山町相川成立の端緒となった集落跡であるにも係らず、これまで本格的な調査が行われていないため、遺跡の規模や内容については不明な点が多い。

このため、佐渡市教育委員会（旧相川町教育委員会）では、平成15年度から平成20年度にかけて、上相川地区の学術調査（遺構の分布調査・地形測量・確認調査）計画を立案し、将来的な史跡整備を視野に入れた保存目的の範囲内容確認のために調査を実施することとなった。

平成15年度から16年度にかけて上相川地区の分布調査を実施し、当該地の範囲確定を行った。その後、調査の基礎資料とするため、平成16年度に株式会社オリスに委託して当該地の地形測量を実施し、縮尺500分の1及び1,000分の1の地形図を作製した。

平成17年8月1日には、有識者による「佐渡金銀山遺跡調査委員会」が立ち上げられ、調査への指導及び助言を受けることが可能となった。

2 調査方法〔第3図〕

上相川と推定される範囲は、約20haを測り、このうち調査対象面積が約58,100㎡である。調査区の設定については、絵図に描かれた町割りや現在の地形をもとにこれを3分割し、それぞれ1ヵ年の試掘確認調査を実施する合計3ヵ年の調査計画である。当該調査は、調査成果をもとに遺跡全体の性格を位置付け、今後の調査方針・調査方法を検討するための基本調査と認識している。

調査区には、地形図作成時に基準杭を中心に幅15m四方のグリッドを対象地全域に設定したが、今回の調査では、トレンチ設定に伴う地形上の理由から活用していない。

平成17年度の調査対象地は、右沢浄水場の南側にあたる小右衛門町・本町と呼ばれる12,400㎡の範囲である。対象地は、東西に細長い場所であるため、右沢浄水場付近を境として便宜的に調査区の東側をA区、西側をB区と呼称した。

調査に先立ち、調査区内のテラス・石垣が存在するすべての場所の樹木伐採を行い、落葉等を除去した上で、視認できるすべてのテラス・石垣の現況写真を撮影した。

トレンチの設定にあたり、県文化行政課の指導のもとに、確認されたテラスの中から遺存状態や調査に支障をきたさない場所のうち、任意の位置に、総数11ヵ所、幅約2mの調査トレンチを設定し、規模の大きいテラスについては、トレンチに直交する形で幅1.5mのサブトレンチを3ヵ所設定した〔第3図〕。これらを人力により表土から薄く掘削、精査して、遺構・遺物の有無、土層の堆積状況を確認した。

遺構番号は、トレンチ検出遺構は、検出順に「T8（遺構番号）」というようにトレンチの遺構ごとに通し番号を付けた。テラス及び石垣は、検出順にそれぞれ「（遺構番号）平坦面」、「構造物」（遺構番号）」というように通し番号を付けた。

遺構の測量方法は、トレンチごとに平板測量により、平面図を作成した。検出された遺構のうち、代表

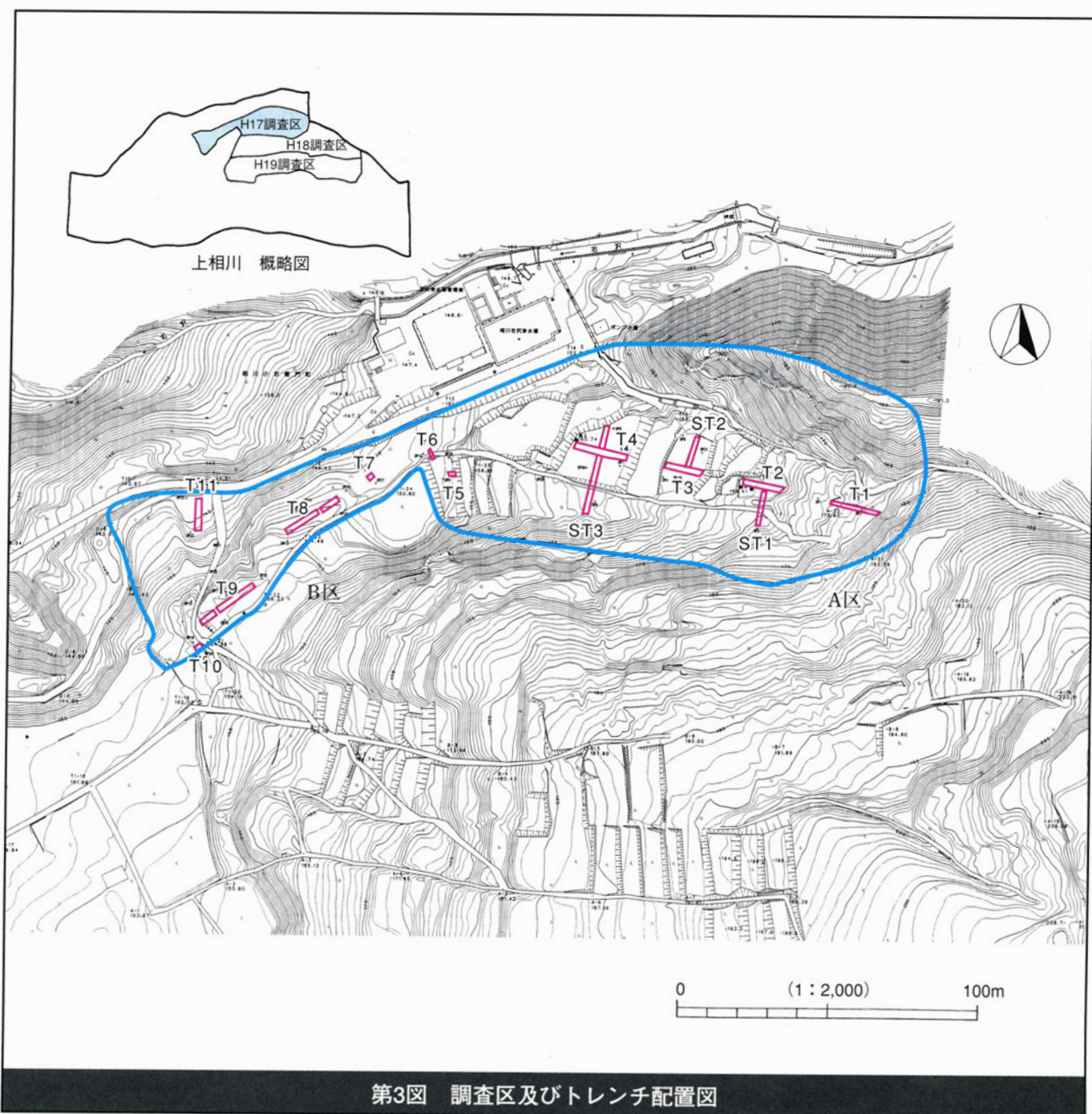
的なもの数基を半割し、土層断面図を作成した。これらの平面図・土層断面図は、縮尺20分の1で図化し、詳細な記録作成が必要と判断された遺構のみ10分の1で図化した。

テラスの測量は、平板測量により、範囲を測量して地形図に加筆した。

石垣の測量は、株式会社セビアスに委託して、デジタル画像による写真解析・図化を行ったが、今回の概要報告では掲載していない。石垣のみに限らず、今後測量によって得た記録は、デジタル化に対応させていく予定である。

遺物の取上げ方法は、各トレンチに2m間隔で小グリッドを設定し、小グリッドごとに取上げた。この他に、地表面で採集できる遺物は、テラスごとに取上げた。

トレンチ調査の他に、調査区内に散乱する石磨、扣石などの石製品の分布状況及びズリ（石英片）の散布状況を調査した。石製品については、種別・法量・特徴・石材・遺存状況等を記録し、個別に写真撮影を行って、平板測量により、200分の1で位置図を作成し、地形図に合成させた。ズリの散布状況は、テラス、石垣、道を中心に、任意に1m四方の枠を設置し、その中での散布密度・ズリの大きさを計測した。



第3図 調査区及びトレンチ配置図

3 調査の経過

平成17年7月から調査を開始し、同年11月に終了しており、調査面積は合計291㎡である。

- 6月16日 佐金室第20号により県教育委員会宛で発掘調査の着手報告（法第99条）を提出する。
- 6月24日 右沢浄水場へ機材を搬入する。
- 7月8日 作業員雇用開始。樹木伐採を開始する。篠竹が密集し非常に多くの労力を要する。
- 8月1日 樹木伐採・清掃の完了した平坦面の写真撮影を開始する。検出した石造物・石製品の撮影を開始する。
- 8月24日 県文化行政課北村副参事が来跡し、調査指導を受ける。第1回佐渡金銀山遺跡調査委員会が開催される。
- 8月25日 萩原三雄、庄谷邦幸、村上隆調査委員が来跡し、調査指導を受ける。
- 9月1日 調査区の樹木伐採作業が完了する。
 - 9日 トレンチ1、2の調査を開始する。調査の完了したものより土層断面図・平面図を作成する。
 - 12日 トレンチ3の調査を開始する。
 - 13日 トレンチ4の調査を開始する。トレンチ1で石垣（構造物Ⅱ44）が検出される。
 - 26日 トレンチ9、11の調査を開始する。
 - 28日 トレンチ8、10の調査を開始する。トレンチ10で石積み（構造物Ⅱ47）が検出される。
- 10月3日 トレンチ8、9よりピット各1基が検出される。トレンチ9の土壌サンプル（被熱土塊）を採集する。
 - 5日 トレンチ7の調査を開始する。
 - 6日 トレンチ5、6の調査を開始する。トレンチ9の土壌サンプル（ユリカス）を採集する。
 - 7日 サブトレンチ1の調査を開始する。
 - 11日 サブトレンチ2の調査を開始する。
 - 14日 県文化行政課春日真実主任調査員が来跡し、調査指導を受ける。サブトレンチ3の調査を開始する。
 - サブトレンチ1でピット1基が検出される。
 - 17日 トレンチ8土坑4基・ピット7基が検出される。トレンチ9で土坑2基、ピット2基が検出される。
 - 19日 サブトレンチ3の土壌サンプル（鉾滓）を採集する。
 - 21日 トレンチ5で土坑1基が検出される。サブトレンチ3で石垣（構造物Ⅱ45）が検出される。トレンチ6で石垣（構造物Ⅱ46）が検出される。
 - 26日 トレンチ9の土壌サンプル（炭）を採集する。トレンチ9でピット1基が検出される。
 - 31日 トレンチ9の土壌サンプル（ユリカス、焼土）を採集する。トレンチの埋め戻し作業を開始する。
- 11月2日 調査区で検出されたすべての石製品の位置図を作成する。
 - 15日 調査区の埋め戻し作業が完了する。撤収準備を開始する。
 - 17日 現地調査が終了する。
- 12月13日 佐金室第43・44号により新潟県佐渡西警察署長宛てで遺物発見届、県教育委員会宛てで遺物保管証を提出する。

佐金室第45号により県教育委員会宛で発掘調査の終了報告を提出する。

Ⅲ 調査概要

1 遺構〔第4～8図〕

調査によって確認された遺構は、テラス47基、石垣55基、石段1基、道跡2条、土坑10基、ピット20基、性格不明遺構2基である。

各トレンチにおける土層の堆積状況の比較は、調査区内の高低差が著しく、トレンチ設定間隔も広いいため、トレンチ間での基本土層の対応は行っていない。

(1) テラス〔第4図〕

検出されたテラスは47基である。平面形状は様々であるが、A区の西側及びB区では町割を示すような長方形に近い形状が多くみられる。

A区では、道1より北側の輪郭の明確なテラスの中に、畦畔跡と思われる段差や排水用の樋、鉄管の設置がみられるものが多く、こうしたテラスの傾斜角は水平に近いものが多い。これらは、昭和期に水田耕作が行われた場所と考えられ、聞き取り調査による水田利用の場所と合致する。こうした場所に設定したトレンチ2～4、サブトレンチ1～3（北側）の土層では、旧耕作土や水田造成に伴う盛土がみられた。また、トレンチ4では、斜面掘削に伴う土砂や礫を北一西の斜面裾に盛ってテラスを拡大したと考えられる土層があり、現状で視認できる道1の南側に残るマウンドや道1の一部と併せて、これらの造成の際の排土によって構築されたものと考えられる。

道1より南側のサブトレンチ1・3（南側）では、盛土の下層にユリカスと思われる幅約10～20cmのシルト層や幅約10cmの炭化物層がみられ、トレンチ1、6、サブトレンチ3では道1の旧道跡、石垣跡が検出された。

これらのことから、A区は、江戸時代に造成された小規模なテラスの存在した場所に、昭和期の水田耕作に伴う大規模な造成が行われたことで、江戸時代の生活面が破壊された場所が多いと考えられる。

B区では、A区でみられるような水平に近い傾斜のものは少なく、緩やかな傾斜をもつテラスがほとんどであり、テラスの規模も小さいものが多い。中でも、トレンチ8、9では、トレンチの土層断面から、複数の小規模なテラスが連続する例がみられた。こうしたトレンチでは、褐色土や貼床と考えられる橙色の粘質土による生活面と考えられる整地層が2～3面にわたり存在し、下層には、テラス造成に伴うにぶい黄褐色の砂礫層による盛土がみられる。また、トレンチ9では、ユリカスと思われる幅約10～25cmのシルト層や幅5～10cmの炭化物を含む層が広範囲にみられ、トレンチ8、11では、このシルト層や幅約5～10cmの炭化物層が部分的にみられるが、他のトレンチではみられなかった。

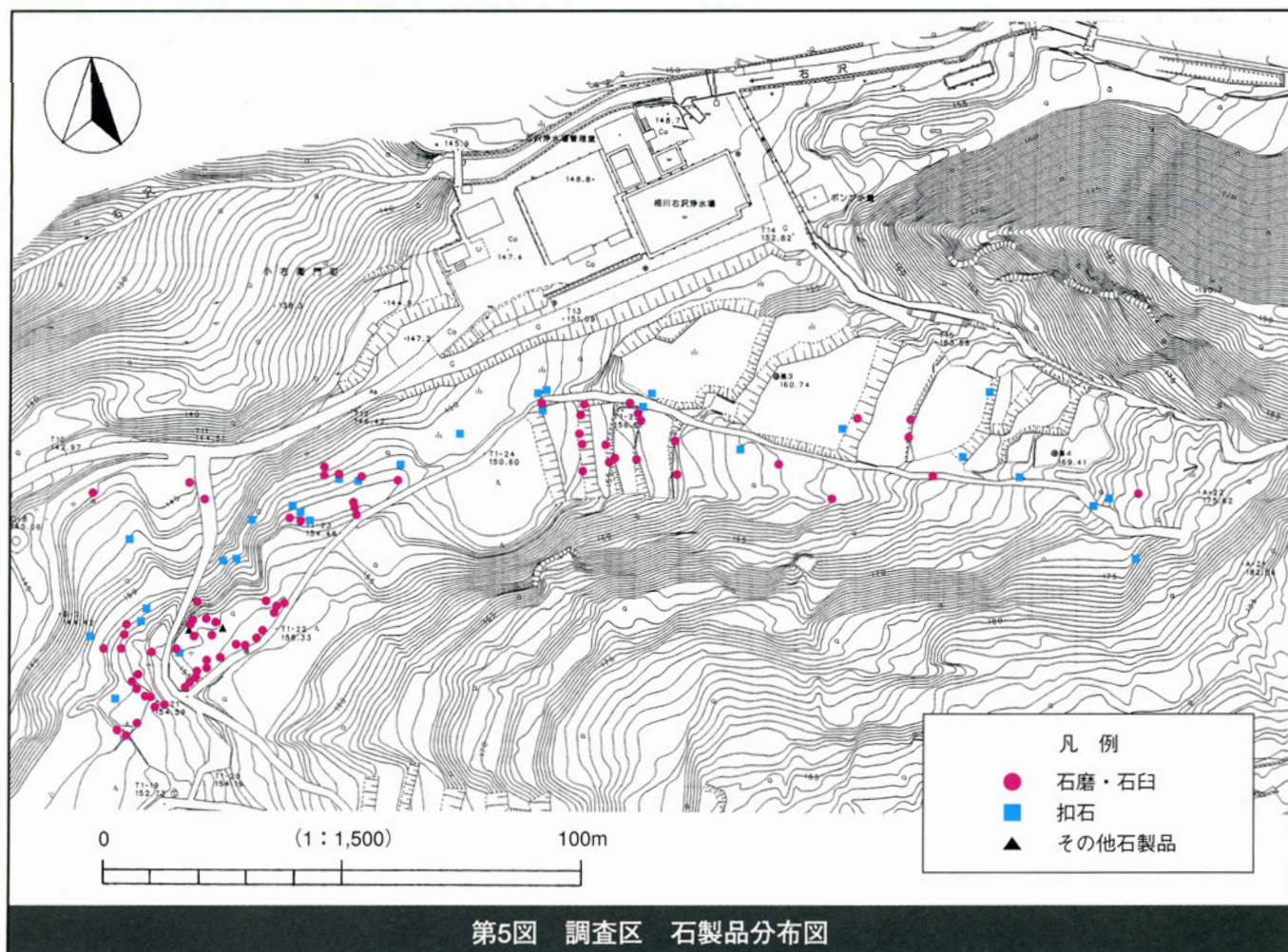
(2) 石垣・石段〔第4・5図〕

検出された石垣は55基、石段は1基である。

石垣は、地形上の制約から、高さが1mを超えるものから30cm前後のものまで様々であり、整然と積まれたものはみられない。また、B区の西端の石垣では、古い石垣の前面に新たに石垣を構築した例もみられた。このほかにも、不要な礫を斜面に廃棄したものか、石垣が崩落したものか特定のできないものもあった。

石磨や扣石等の石製品が石垣石に転用された例も多く、このような石垣は、A区の西側の南北に長いテラスに伴うものやB区のトレンチ8～10付近の一部の範囲で多く確認されている。

石垣の構築年代は、現在までのところ、石の積み方等に明確な分類基準が設けられないため、詳細は不明である。しかし、A区の道1北側に見られるテラスに付随する一部の石垣の中には、周辺で現在も露頭のみられる玄武岩のみを用いた石垣がみられ、こうした石垣は、昭和期の水田造成時に出土した礫を使用して構築されたものと考えられる。



(3) 道跡〔第4図〕

検出された道跡は2条である。

上相川では、調査前より、過去の土地更正図などから「アカミチ」と呼ばれる公道の存在が判明していた。こうした公道は、江戸時代の絵図と比較してもほぼ同じ位置を通るため、当時の町の範囲を判断する資料となりうる。

平成17年度の調査区内には、A区よりB区へと続く公道の道1（幅1.5～2m）があり、B区では、樹木伐採により、新たに道1に接続する幅1.5～2mの道2が確認された。道2は、明治時代の土地更正図と照合してもほとんど変化がないことから、ほぼ当時の様相を示しているといえる。

トレンチ6、サブトレンチ3では、道1の旧道面と判断される土層が確認されている。今回の概要報告では、これらの土層断面を掲載していないが、いずれも、幅1m前後のもので、道跡と確定できる硬化面はみられなかった。このうち、サブトレンチ3で検出された旧道跡及びそれに伴う石垣は、現道から南へ1mほどずれていることが判明した。

(4) トレンチ検出遺構〔第6・7図〕

トレンチより検出された遺構は、石垣3基、道跡1条、土坑10基、ピット20基、性格不明遺構2基である。

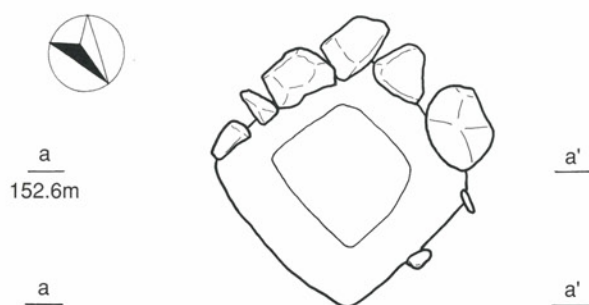
遺構平面形の概ね長軸が50cm以上のものを土坑に、50cm未満のものをピットとした。

全体的にみると、トレンチ8、トレンチ9に遺構が集中しており、トレンチ8、9を設定したテラスは、集落廃絶後に水田耕作などの開発の影響を受けていないことが判明した。検出された遺構のうち、特徴的なもの数基を半割して、遺構の内容確認を行った。

今回の概要報告では、一部のトレンチ及び土層柱状図、遺構のみ掲載した。

トレンチ 8ピット1〔第6図〕

トレンチ8東端に位置する。長径54cm、短径52cmのほぼ正方形の遺構で、側壁に沿って幅20cmの明褐色土が方形に巡り、中央部は平面円形である。また、遺構の南一西にかけての外縁には、直径20cm前後の礫が巡るが、覆土では礫は配置されていなかった。遺構深度は約40cmで、あまり深くない。底面には炭化物を含む層がみられたが、側壁を覆う覆土は被熱した形跡がなく、使用前の炉跡、根固めのための礫・明褐色土を伴う柱穴等の可能性が考えられる。覆土からの遺物の出土はなかった。



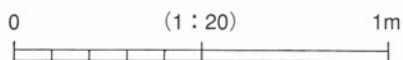
- 1 暗褐色土 しまりあり、粘性弱 礫・炭化物含む。
- 2 にぶい黄橙色土 しまりあり、粘性弱 礫少量含む。炭化物、暗褐色土、明褐色土粒含む。
- 3 黒色土 しまりなし、粘性やや弱 炭化物多量に含む。赤褐色土粒少量含む。
- 4 明褐色土 しまりあり、粘性やや弱 炭化物わずかに含む。
明赤褐色土粒少量含む。白色土粒含む。
- 5 褐色土 しまりややあり、粘性やや強 炭化物わずかに含む。



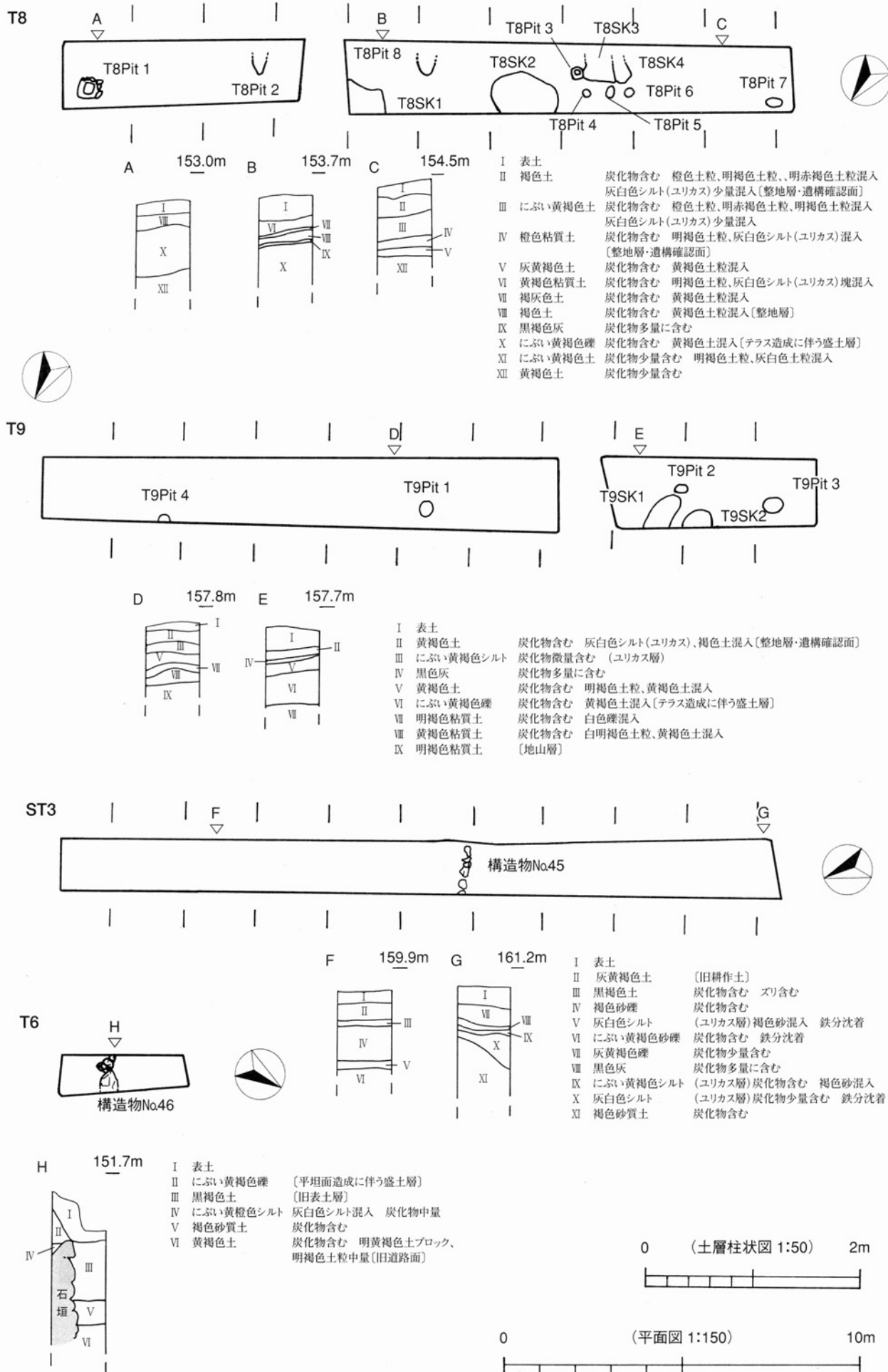
ピット1 検出状況（東から）



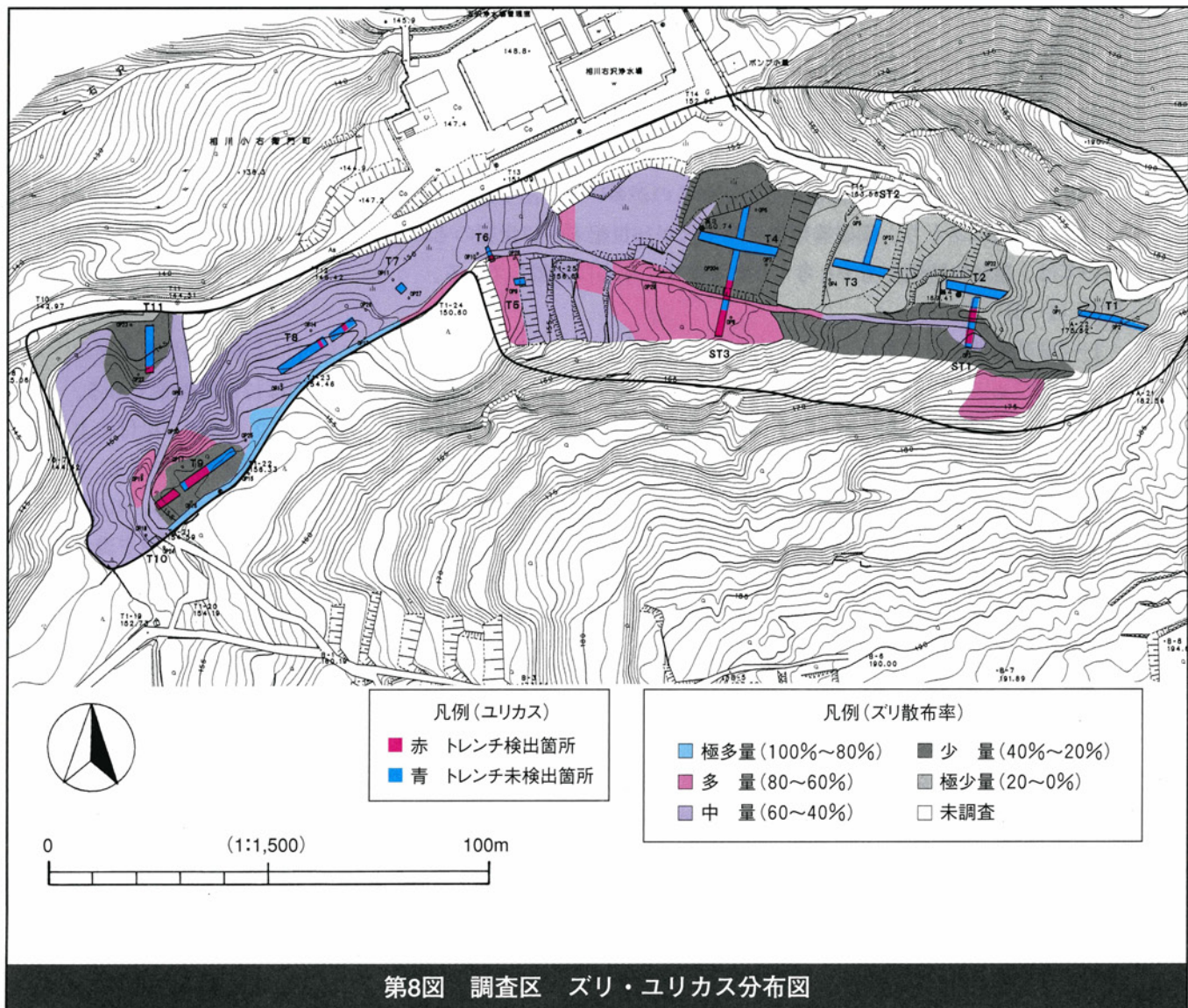
ピット1 断面（北東から）



第6図 トレンチ8 ピット1



第7図 トレンチ遺構平面図・土層柱状図



2 遺物〔図版1・3〕

出土・採集された遺物は、江戸時代の陶磁器、土器(皿・灯明皿)、土製品(羽口等)、石製品(磨、扣石、硯等)、金属製品、銭貨(寛永通宝等)、鉾滓である。

このうち、陶磁器は、調査区の全域に分布するが、場所によって、生産年代の幅にばらつきがある。トレンチ1~4、6、7、サブトレンチ1、3では、17世紀代のものが多く、トレンチ5、トレンチ8~11では、17世紀~19世紀のものが出土する傾向があるが、全体的に生産年代が1600年代(17世紀)のものが中心で、このことは、上相川で人々が盛んに活動した時期を示すと思われる。鉾山と調査区を直接に関連付ける遺物である石磨(粉成用上磨・粉成用下磨)・扣石は、調査区全域で発見された。また、鍛冶か製錬作業を行った証拠となる鉾滓・羽口も、出土・採集している。

テラス・トレンチごとにみた採集・出土遺物の分布状況概略は以下のようになる。

- 1 陶磁器の年代が17世紀~19世紀にまたがるトレンチの近接地には、石磨・扣石が多く分布している。
- 2 陶磁器の年代が17世紀に偏る傾向のあるトレンチの近接地には、石磨・扣石があまり分布していない。但し、石磨・扣石には石垣石に転用されたものが多く、ここでは転用された石も含めて述べているため、これだけで直ちに石磨・扣石を用いた作業場所の特定にまでは至らない。後世まで活用された土地に、周辺にあった石磨・扣石が集められた可能性があるからである。
- 3 羽口と鉾滓の分布域は重なる。トレンチ4・サブトレンチ3付近と、トレンチ7~9付近である。
- 4 石磨・扣石の分布域と羽口・鉾滓の分布域を見比べると、トレンチ7~9付近では重なるが、トレンチ

- 4・サブトレンチ3付近では羽口・鉾津分布域の方が、若干標高の高い場所へずれるように見える。
- 5 トレンチ8・9・11は出土陶磁器の年代幅の広さだけでなく、出土遺物の種類の多さも目を引く。
- 6 サブトレンチ3は出土陶磁器が17世紀のものが多く、出土遺物の種類の多さが目を引く。

報告書掲載にあたり、陶磁器類は生産年代が16世紀末～17世紀のものを中心に、また、その他の遺物については、遺跡の特徴を示すと考えられる遺物を中心に掲載している。

磁器 (1～5)

1～4は肥前系磁器である。1は碗で、細身の高台をもち、器厚は薄い。外面に染付による装飾を表すが意匠は不明である。また、外面体部下半及び高台内に染付による圈線を巡らす。時期は17世紀後葉である。2・3は皿の底部片である。ともに断面四角形の高台をもつ。2は内面に染付による菊花文、外面に染付による圈線を表す。高台内の釉は黒っぽく発色する。高台畳付には砂が付着する。時期は17世紀前半である。3は器厚が厚く、内面に染付による装飾を表すが意匠は不明である。時期は17世紀中葉～後半である。4は水滴である。型打ち成形によりウサギの形を呈す。外面に透明釉を掛け、色絵装飾により目・耳の色を表すが、外面底部は露胎である。外面底部には、布目痕が残る。時期は17世紀後半と思われる。

5は中国磁器の皿である。底部の器厚は薄く、断面台形の高台をもち、高台畳付は露胎である。内面には染付による圈線及び「壽」字を表す。高台内面にも施釉されているが、釉を透かして放射状の削り痕が見える。景德鎮窯の製品と考えられ、時期は17世紀前半である。

陶器 (6～15)

6～10は肥前系陶器である。6は碗で、断面台形の高台をもち、器厚は厚く、口縁部が外反する。内外面に釉を施すが、外面底部は露胎である。白色の釉の上から、装飾的に銅緑釉を施す。時期は17世紀後半と思われる。7～9は皿である。7・8は底部片で、いずれも内外面に釉を施すが、外面底部は露胎である。見込みに胎土目積み痕が見られる。時期は16世紀末である。9は内外面に釉を施すが、外面底部が露胎である。口縁部は溝縁である。見込みに砂目積み痕が見られる。時期は17世紀前葉である。10は甕である。口縁部を外方へ屈曲させる。内外面に鉄釉を施す。時期は16世紀末～17世紀初頭である。

11～14は瀬戸・美濃系陶器である。11は皿である。器厚が厚く、断面台形の高台をもつ。内面は型押しで菊花を象り、内外面に長石釉を厚く施し、釉には貫入が見られる。いわゆる志野の皿で、時期は16世紀末～17世紀初頭である。12は天目茶碗で、口縁部は上方へ屈曲し、口縁端部は外反する。内外面に錆釉を施すが、外面底部は露胎である。時期は16世紀末～17世紀初頭である。13は碗で、削り出し高台をもち、内外面に緑色の釉を施すが、外面底部は露胎である。時期は16世紀後半～17世紀初頭と思われる。14は天目茶碗で、器高が厚く、高台内部はあまり深く削りださず、体部上半をやや内湾させ、口縁部は外反する。内外面に鉄釉を施すが、外面底部は露胎である。時期は16世紀末～17世紀初頭である。

15は関西系陶器の甕である。口縁部を外方へ折り返して玉縁状にし、内外面に錆釉を施す。

土器 (16・17)

陶磁器類の遺物のほかに、土器の皿も多く出土している。中には、口縁部に煤が付着して、灯明皿として使用されたことがわかるものもある。土器類は、ろくろで成形したものと、型押し等で手づくね成形したものにと大別できる。

16は皿である。外面底部に静止糸切り痕が残り、口縁端部は丸く仕上げる。静止糸切り痕があることや、体部の立ち上がり方から、ろくろを用いて成形されたと思われる。17は灯明皿である。器厚は厚く、内面には横ナデ痕が残り、外面底部は平坦でなく丸く仕上げている。このことから、手づくね成形したと思われる。口縁端部は丸く仕上げ、煤が付着しているため、灯明皿として使用されたことがわかる。

土製品 (18・19)

土製品も多くの種類が出土しており、五徳・羽口等が出土している。これらは、平成6(1994)年～平成12(2000)年にかけて行われた佐渡金山遺跡(佐渡奉行所跡)の発掘調査でもみられる形態である。

このうち、羽口は、鍛冶作業や製錬作業用の炉の内部温度を上昇させるために、強制的に酸素を送り込む送風口として使用する土製品であり、鉾滓の出土と併せて、金属製の採掘道具の製造・修理を行う鍛冶作業あるいは鉾石製錬作業が、調査区内で行われていたと推測させる遺物である。

18・19は羽口である。18の外面の送風口は被熱により熔融し、金属の熔融物が付着する。破片であるが、外郭が断面角形を呈し、断面円形の孔が貫けている。19の外面は被熱により熔融し、先端部に金属の熔融物が付着する。破片であるが、外郭が断面円形を呈し、断面円形の孔が貫けている。

石製品 (20～22)

石製品のうち、この遺跡を特徴付ける遺物として、石磨（粉成用上磨・粉成用下磨）・扣石がある。この他に穀物や豆類を磨り潰すのに用いる粉挽き臼がある。

扣石は鉾石の粗割りに用いられる。比重の高い石材に、半球形・箱型の窪みを2～4つほど穿ち、そこに鉾石を入れて、鉄製のハンマーで砕いている光景が、江戸時代の佐渡奉行所内を描いた絵図面にある。

粉成用上磨と粉成用下磨は、一対となって動き、下磨の上に上磨が乗って、上磨の重みで鉾石を磨り潰す。

調査区でも多くの石磨や扣石が発見・出土しており、一部にズリ（石英片）やユリカスが集中していることから〔第8図〕、当該地で鉾石を磨り潰す工程の作業が行われていたことが推測できる。

20は粉成用上磨で、磨面は一つである。磨面には鉾石を磨り潰すときにできる回転痕が見られる。磨面の中心に供給孔が貫通している。磨面には2条の溝が供給孔に接して刻まれている。また、上磨の側面には、挽木穴を設置したと思われる孔や溝がある。石材は佐渡市下相川で産出する球顆状流紋岩を用いる。

21・22は硯である。21は中央部に窪みが見られる。石材は頁岩を用いていると思われる。22は練り物の硯である。

金属製品 (23～26)

出土・採集された金属製品には、銅製品・鉄製品がある。

出土した銅製品のうち、時期が江戸時代とわかるものには、煙管がある。また、今回図示していないが銅製の片口や環状金具も出土している。鉄製品は、総じて錆が多く付着し、原形が不明なものが多い。形状が判別できたものには、和釘・犬釘・釣子等があるが、時代の特定できる遺物は少ない。

23・24は煙管の雁首である。時期は17世紀～18世紀のものと思われる。25・26は煙管の吸口である。いずれも表面に緑青が付着する。

銭貨 (27～29)

銭貨は、22点出土・採集されているが、永楽通宝（模鑄銭カ）、真鍮製の寛永通宝（四文銭）、銭種不詳の鉄銭、雁首銭が各1点ずつある他は、全て銅製の寛永通宝（一文銭）である。

永楽通宝は、直径・厚みから考えて国内で模鑄された可能性がある。模鑄銭であれば、16世紀後半～17世紀前半にかけて鑄造された可能性がある。

銅製の寛永通宝（一文銭）は、寛永13年（1636）から天明元年（1781）佐渡相川の銀座閉鎖まで各地で鑄銭されるが、鑄造期間は3期に大別される。1期（古寛永）は寛永13年（1636）～万治2年（1659）、2期（寛文期の文銭）は寛文8年（1688）～天和元年（1683）、3期が元禄10年（1697）～延享4年（1747）及び明和4年（1767）～天明元年（1781）である。〔兵庫埋蔵銭調査会 1996〕

27・28は寛永通宝である。このうち、27は1期＝古寛永で、1636年～1659年にかけて鑄造されたものである。28は表面に付着物があり、鑄出された文字の書体は不鮮明であるが、「寛永通宝」と判読できる。

29は、煙管の雁首を押し潰して銭貨に模した雁首銭である。近世墓へ六文銭として副葬される事例や緡銭（さしぜに）に紛れ込ませた事例があるが、他の遺構や遺物と共伴して出土していないため、用途は不明である。

ま と め

A区では、規模の大きいテラスのほとんどが、後世の造成により、破壊されていることが判明した。

B区では、調査以前にはわずかな窪みとしか判断できなかった場所でも、小規模なテラスが連続していることがわかった。これらのテラスの土層断面をみると、複数回に分けてテラスが造成されている箇所があった。今後の調査成果を加味して、集落存続中の時代ごとに、造成された時期の対比を行う必要がある。

石磨や扣石、ユリカス、ズリの集中する範囲があり、鉾石の製錬作業が行われていた可能性が高い。

しかし、今回の調査では、遺構がわずかしこ検出されておらず、集落構成については、確認されたテラスや石垣から、ある程度推測することしかできなかった。検出された遺構についても、半割したものは一部の遺構のみであった。今後、遺構の内容確認等に万全を期すため、樹木伐採作業の効率化や調査方法見直しが課題となる。

調査区からは、16世紀末から17世紀を中心とする陶磁器類が多く出土しており、これらは上相川で人々が盛んに活動した時期を示すものである。中には、明末清初の中国磁器・初期伊万里の皿や天目茶碗などの陶磁器類が出土していることから、周辺に山師などの有力者の住居があった可能性がある。調査区内に設定した調査トレンチによっては、19世紀代の陶磁器が出土する場合もあり、土地利用状況の消長や変化が見出せる。

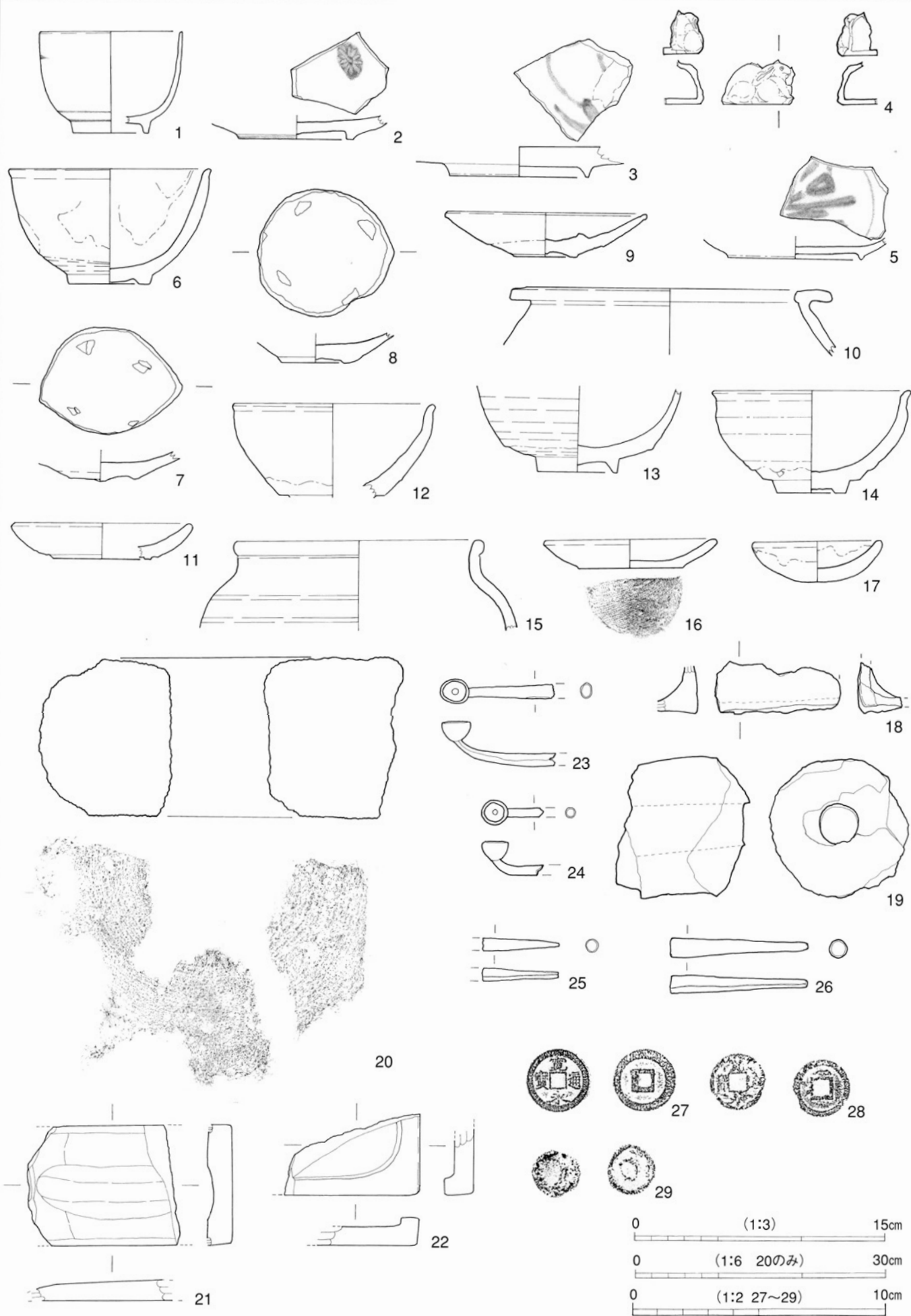
陶磁器類の他にも、鉾石の粉碎に使われた扣石・石磨や、鍛冶・精錬作業に使われていたと考えられる羽口や鉾滓が多く出土・採集されており、上相川内の各町々で小規模ながら、鉾山活動の役割を担う人々の存在がうかがえる。

今回の調査で実施したズリやユリカス、石製品（石磨、扣石）の分布状況把握については、テラスの性格判断における重要な資料となりうするため、次年度以降の調査でも引き続き実施していく。

本概要報告では、紙面の関係で掲載できなかった資料が多かったため、本報告においては、十分な情報を掲載したいと考えている。このため今後も、文化庁、県文化行政課、調査委員の関係者各位との連絡を密に行い、適宜調査指導を受けながら調査を進めていきたい。来年度以降の試掘確認調査や本報告書作成に向けて、発掘調査体制・調査方法を適宜見直し、調査区内の石製品やズリの散布状況、テラス・石垣の配置状況を詳細に調査し、出土遺物の組成や傾向の分析を行ったうえで、佐渡金山遺跡（上相川地区）の性格を捉えるように努めたい。

参 考 文 献

- | | |
|-----------|--|
| 相川町史編纂委員会 | 1973『佐渡相川の歴史』資料集3佐渡金山資料 相川町 |
| 相川町郷土博物館 | 1986『金太郎窯発掘調査報告書』 |
| 相川町教育委員会 | 2001『相川町埋蔵文化財調査報告第3 佐渡金山遺跡（佐渡奉行所）（陣屋・役所・役宅・御金蔵・寄勝場）』 |
| 相川町教育委員会 | 2003『佐渡金銀山 間歩分布調査寺社調査報告書』 |
| 九州近世陶磁学会 | 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』 |
| 田中圭一 | 1993『佐渡金銀山の史的研究』刀水書房 |
| 兵庫埋蔵銭調査会 | 1996『日本出土銭総覧』 |





調査区〔A区〕全景（西から）



A区 テラスの状況（南から）



B区 テラス及び石垣の状況（北から）



B区 石段検出状況（北から）



トレンチ9 ユリカス検出状況（北から）



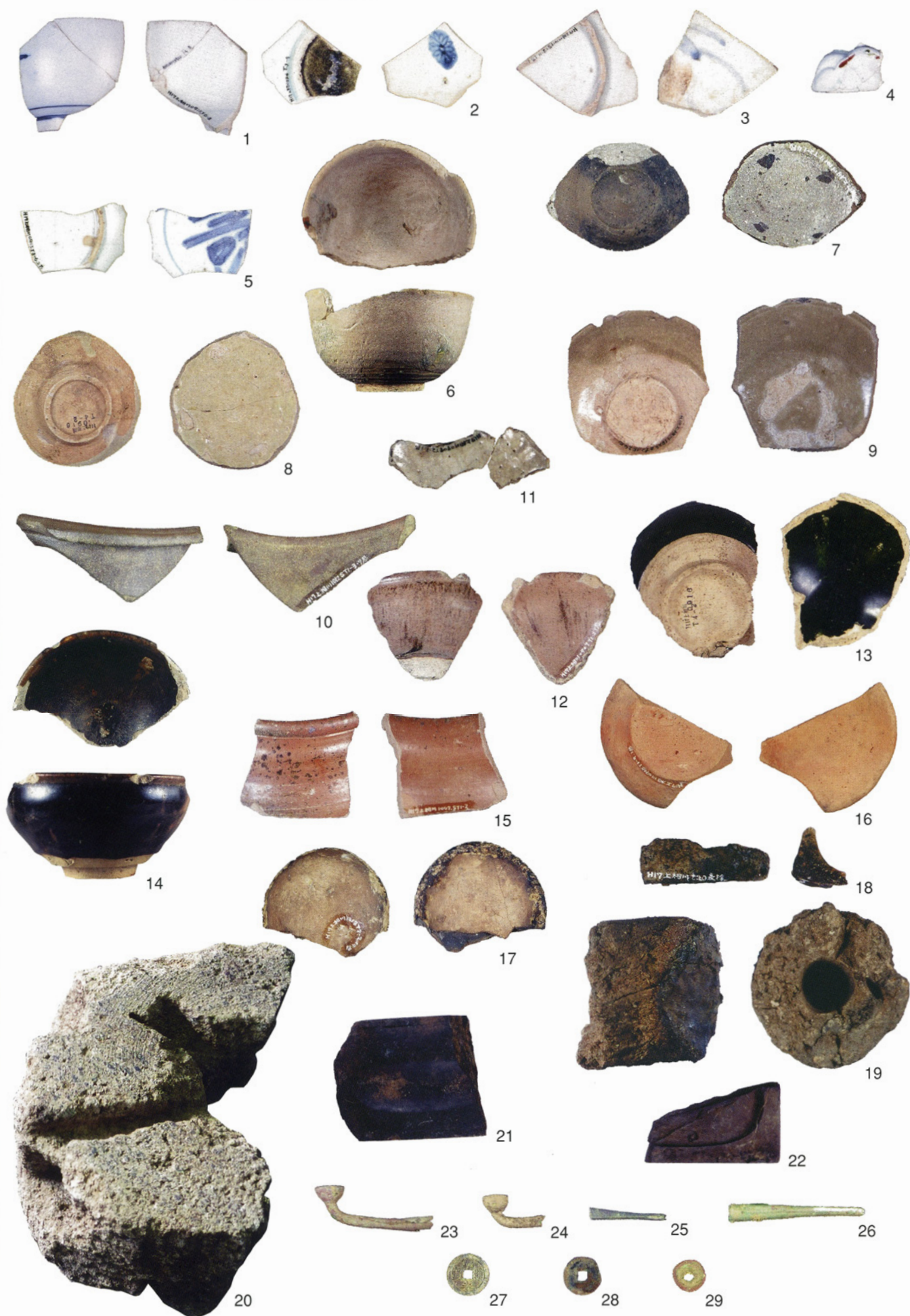
トレンチ9 ユリカス検出状況（北から）



トレンチ8 土層断面（西から）



トレンチ9 ユリカス検出状況（北から）



報告書抄録

ふりがな	さどきんぎんざん							
書名	佐渡金銀山							
副書名	平成17年度 佐渡金山遺跡（上相川地区）確認調査概報							
シリーズ名								
編著者名	滝川邦彦、宇佐美亮							
発行	佐渡市教育委員会 平成18年3月31日				市町村コード		15224	
事務局	〒952-1592 新潟県佐渡市相川塩屋町26番地 佐渡市教育委員会生涯学習課佐渡金銀山室 TEL0259-74-3115							
遺跡名 (遺跡番号)	ふりがな 所在地	国土地理院地形図		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		1/5万	1/2.5万					
さどきんぎんいせき 佐渡金山遺跡 (302)	にいがたけん さどし あいかわ 新潟県佐渡市相川 こえもんまち ばんちほか 小右衛門町1番地他	河原田	相川	38° 2′ 22″	138° 15′ 28″	H17.7.8～ H17.11.17	291㎡	保存目的の 遺跡範囲 内容確認
遺跡名	主な遺構	種別	主な時代	主な遺物		特記事項		
佐渡金山遺跡	土坑・ピット 石垣・石段 テラス	集落跡	江戸時代	陶器・磁器・土器・ 鉄製品・銅製品・銭貨・ 石磨・扣石・砥石・硯・ 羽口・鉋滓				

佐渡金銀山

平成17年度 佐渡金山遺跡(上相川地区)確認調査概報

編集・発行 平成18年3月31日
佐渡市教育委員会 生涯学習課
佐渡金銀山室
新潟県佐渡市相川塩屋町26番地
電話 0259-74-3115

印刷・製本 株式会社 第一印刷所